

生死涅槃も唯此の呼吸、
包む大我が其の儘自己と
ほんにわたしの心の基、
今の煩惱すくさま佛、
修する修行は皆邪魔外道、
満ちて居るから無私の慈悲、
末によかれと慈悲の無我、
茲の道理が明瞭すれば、
五倫五常の其本體よ、
神や佛のその真中が、
吾人君子は智恵あり過ぎて、
茲の原理に到着すれば、
直になくなる前滅後生、
新陳代謝に繼續すれば、

呼吸固より宇宙を包む、
寫しかゆれば月日も空も、
這や一念實地を得れば、
毛筋はどでも人我があれば、
神や佛は元より慈悲が、
親が我子へ意見をすれば、
無我は大我で大我は無我よ、
慈悲は道徳倫理の基で、
浮ぶ一念起滅を知れば、
終に不生と不滅のみやこ、
近き睫毛も見えない如く、
人の心は其の場で出来て、
是れは過去より未來にかけて、
俺に不足のおもひなし、

諸法實相此の境界が、
西も東も南も北も、
こゝに至れば儒佛も神も、
陸みあふ世は名の標準も、
硬くまるめて真如とすれば、

直に寂光浄土のすまひ、
四維上下は金色如来、
耶蘇も其儘一道場に、
濠も桓根もいらぬ御代で、
南枝妬まん北枝の花。

五五、一盲衆盲を引く莫れ

方今昭代の餘澤として、才子學者頻々として輩出し、或は詩才を闘はしむるに想を天外に馳せ、或は筆を人情の間に操るに、縦横百出屈折自在であつて却々兎も俺の様な文盲の者は世間へ出ても口が明かない。夫に引き替へ學者智者のものせし著述は實に覗き鏡や活動寫真を見る如く、次から亞へ面白く文が綴つて有つて誠に早や寝むたき目も覺めて、字を覺え學問するには結構である。但し天地の太祖萬物の根元たる心靈を自得するに當ては、理窟禪や有心禪斗でも如何かと思はれる。幸に茲に余が房へ來た或る客僧の書いて置た頌を思ひ出した。

不去不來是何物、法身幻化勞無功、

門頭調曲天真妙、閑聽松濤吼太空、

譯して曰く。不去不來是れ何物ぞ、法身幻化勞して功なし、門頭曲を調ふ天
眞妙なり、閑に松濤を聴けば太空に吼ゆ。

古人曰く己に物なくして人に物を施さんとするも人承知すべからず。己が眞
實に安心立命の地に達せずして、人に向て獲得せよと勸むるも人肯すべからず。
故に禪法は尙更人を導くに當つて、一旨衆旨を引て、眞夜の苦境に導くは善に似て
實は邪魔外道である。唯能く我が肚裏に向つて人を救ふべきである。

以下余と親しく往復しつゝある居士數名の所得を述べて數章を掲ぐれども之
れまた余が思考と一致し、余が安心と同一なる者なれば敢て別種のものにあらざ
ることを茲に一言附記して置くのである。

五六、前滅後生

偕此の前滅後生は獅呼吸の出入りと同じ様なものである。呼が滅すれば吸が

生じ、吸が滅すれば呼が生じて、一出一入、新陳代謝する、茲が即ち前滅後生の境界で
ある。

譬へば茶を飲むにしても然である。茶が一ト口舌に觸るや否や。呼が滅して
吸が生じて居る。茶が一ト口喉を通るや否や。吸が滅して呼が生じて居る。あ
の菓子を一ト口と思ふ時には。茶の念が滅して菓子の念が生じて居る。菓子を
一ト口食ひ終つて茶をもう一ト口と思ふ時には。早や菓子の念が滅して茶の念
が生じて居る。

雀のナウ〜。鴉のカア〜。之れ又同じ道理にてナウ〜カア〜が口を
出たから耳に入るので、ナウ〜カア〜が口を出る刹那、吸が滅して呼が生じて
居る。ナウ〜カア〜が耳に入る刹那。呼が滅して吸が生じて居る。茲が所
謂愚作の戯調。

雀はナウ〜鴉はカア〜啼くのも彌陀佛聞くのも彌陀佛生死は其の儘、茲ら
に在るので、啼くのが死んだら聞くのが生れて、即滅即生、即身即佛、迷悟は無いの
で生るも死ぬのも、一念彌陀佛前世も後世も南無阿彌陀佛で、變りは無いのだ。

である、尙は又茲にランプが光つて居る。其ランプを見た時には、我心既にランプに遷りて居るから我心が滅してランプが生じたる譯である。而して其ランプを見るのは、果して何物が見るのであるかと、研究する一刹那、早やランプが既に我心に遷り居るに依り、此場合にはランプが滅して、我心が生じたる譯である。老師の所謂鐘が鳴る時撞木はオルス。撞木打つ時鐘は無しとは。即ち茲の呼吸であらう。

亦徒然の餘り机に凭て。英雄の事蹟を思へば、机忽ち大閤となり、大坂城となり、朝鮮征伐となるが如く、机が滅すると大閤が生じ、大閤が滅すると大坂城が生じ、大坂城が滅すると朝鮮征伐が生じ、念滅念生瞬時も休まず、輾轉する。茲が即ち呼吸の出入りで、一滅一生新陳代謝、如何なる物でも皆此の通りに、前滅後生と繰り返して更に異動は無い、萬里一條の鐵である。

尙一步を進めて、前滅後生を小解すれば、獨坐無念の時にも、人境相對の中にも、將又机から太閤、太閤から大坂城、大坂城から朝鮮征伐とからからからまで。追思隨想の間にも、我ながら何百息の生滅、即ち何百回の生死を経て居るか、教へ盡せぬ程

である。元來吾人は人と名づくる器具、土で造つた人形で、宇宙の眞理が、其の穴竅を出入りするのを、假りに呼吸と名づけたので、此呼吸の道理、即ち新陳代謝の有様を、前滅後生とも云ふ、前念命終後念即生とも、又生死とも云ふのである。

茲に至ると、生死少しも念慮に浮ばず、朝に生れて夕に死ぬのも、自生自滅で安心立命、一吸一呼で具足圓滿大千世界に悠遊して、其日其日の稼業に精出し、楽しく愉快に、生育老死する事が出来る。是ぞ即ち前滅後生と同化する吾人の本體、南無阿彌陀佛と信じます。

出放題二首

うつり行く心の起滅其の儘が

自づからなる生死なりけり。

佛とてたづぬるものもなかりけり

此の身此の儘佛なりせば。(素心居士)

五七、鴉の鳴き聲を止む

鴉の「カア」を止めて見よとの御高示なるが、其「カア」を止めて見たればこそ「カア」と聞えたのである。「カア」と聞えたのは「カア」を止めたからである。「カア」と啼いた刹那が、「カア」を止めた刹那である。「カア」の音を放つが否や、鴉は無くなつて居る。「カア」の聲を聞くが否や、我は無くなつて居るので、此の人境兩位の無くなつて居る處が、父母未生以前本來の眞面目である。即ち阿彌陀如來が常住する所の寂光淨土である。老師の口調を借りて申せば、啼いた奴が聞いた奴で、聞いた奴が止めた奴である。御高訓の中に、圓通から圓通に入るとは、即ち茲であります。

之を要するに「カア」と啼いたのは「カア」と聞かれたので、「カア」と聞かれたのは「カア」を止めたからで、此の啼いた處聞かれた處が、「カア」を止めた處である。啼かすんば止み様は無い、啼いたればこそ止んだのである。もう少し詳しく申せば、此啼くと。聞くとの中間が止んだ定位で、此の止んだ定位を一方から啼くと云ひ、一方から聞くと云ふ。又中位から止むと云ふので、素々啼くも聞くも止むも無い。一大圓鏡の靈であるから、止めて見よと云ふ日には、鴉の「カア」

どころか、如何なる大雷鳴でも、如何なる大地震でも、止て見る事が出来のである。即ち此の一大圓鏡の靈から、世の音聲を観る日には、啼くも聞くも止むも、素より一元に歸着するので、此一元たる定住不變の位置が、取りも直さず鴉の「カア」を止めて見た境界であると信する。(素心居士)

五八、邪正一如

佛教に邪正一如と云ふ事あり。世人動もすれば、誤解に陥り、邪を爲しても、正を爲しても、一如であれば、四角四面の正道よりも、放縱自在の邪道を踏まんと。之れ迷見の甚しきものにして、邪はどこまでも邪、正はどこまでも正、表はどらしても表、裏はどらしても裏にして、盜賊を爲す者も、盜賊の邪なる事は知りぬべし、判紙の表を見て、之は裏だと云ふ者も無かるべし。之れ邪はどこまでも邪、正はどこまでも正、表はどらしても表、裏はどらしても裏に、相違なき證據にして、世人も此の見解に付ては、毛頭異論の有るべき筈なし。邪正一如、表裏一枚とは、猶ほ邪正の根は一如であり、一如の根から邪正が生れ、表裏の元は一枚であり、一枚の元から表裏が出

ると、解釋すれば、誤解の餘地は無き筈なれども、淺慕にも、得手勝手の理窟を立て、人間僅か五十年、正直貧乏するよりも、物取酒色で、太とく短かく一生を送れなど、は殆んど愚痴の極點なり。

例へば一陣の東風も、西に航する者は順即ち正なりとし、東に航する者は逆即ち邪なりとするが如く、源氏が石橋山に起兵したのは、再び源氏の天下を盛にせんと、正であるが、平家の爲めには邪なるべく、平家が富士川に出帥したのは、單に平家の社稷を全ふせんとの正であるが、源氏の爲めには邪なるべく、大きく觀れば、腹中のパナルス共が、呼吸の出入りに順逆を唱へ、血液の摺違ひに、邪正を争ふのと同じ様なるものである。二宮尊徳の歌に、

見渡せば善さも悪しきも無かりけり

己れ己れが住家にぞある。

とある通り、邪正必竟、一法の両面に過ぎざることなれども、一面から見れば、順風は順風、逆風は逆風、味方は味方、敵は敵に相違ないのが、即今其の儘の實相である。併しながら、之を達觀する日には、東風と云ひ、軍事と云ひ、邪正一如、表裏一枚のものに

歸着するのである。尙一步を進めて正覺すれば、邪正や表裏は云はずもがな、東風も、軍事も、二も、一も、無くなること云ふ。境界になるのであるが、人間界は、人間界の事を研究して其正道を履行するのが、今日差當りの勤務である。

之を要するに、本來邪正あつて、人間あるにあらず。人間あつて後、邪正を分つたものなれば、人間どうしても、邪正の表裏が分らねばならぬ筈である。

一賊走止を爲す。之を名づけて貧富と云ふ、一寶往來を爲す、之を名づけて損益と云ふ。

とは二宮尊徳の金言なれども、邪正も必竟、一心の表裏に過ぎずして、猶ほ一財一寶を離れて、の富損益無きが如く、即ち一心を離れて邪正なきや明らかなり。假令ば親が子に向つて、人の物を盗んではならぬと誠むる慈悲心(正)の裏には、若し此事を爲せば、屹度折檻するぞと云ふ、恐ろしき心(邪)が有るに相違ない。途中圖らず。美人に遭遇したりと假定せよ、嗚呼羞花閉月、絶世の容色であると賞める心(正)の其裏には、戀と云ふ曲者(邪)が潜んで居るに相違ない。盜賊が物を盗む(邪)にしても、其心の裏には、之は善く無い事だと云ふ位の良心(正)は有るに相違ない。暴漢が婦女を

奸する邪にしても、其心の裏に、全く悪い事だなど云ふ位の良心正は有るに相違ない。此良心有るに拘はらず、知つて而して邪行を爲すは事に當つて見境の着かぬ血迷者である。邪正の表裏を知らぬ、無分別者である。己の私欲に眼眩みて人の難儀を見る事が出来ぬ、我利我利盲者である。己れの行爲が人を害する事を知る以上は人は正しく己れに害されて居る事を思はねばならぬ。己れが人に害される時の苦境を思つたならば必らず邪行は出来るものでない。即ち盜賊が被害者の位地に立ち、暴漢が被奸者の位地に立ち、其境遇心事を思遣り、以て己れの邪は人の正で、人の正は己れの邪である事を知つたならば、盜賊も暴漢も決して邪行は出来得べからざる道理である。前にも云ふ通り、本來邪正あつて、人間あるにあらず。人間あつて後、邪正を分ちたるものなれば、苟くも生を人間に享けたる以上、克く能く、此邪正一如の表裏を辯別し、邪に居て正を觀、正に居て邪を觀、表に居て裏を觀、裏に居て表を觀するまでの妙智力を發揮したいものである。

即ち東航者が、西航者の位地を思ひ、西航者が、東航者の位地を思つたならば、一方にては、一時の不順も忍べるだらうし、一方にては、一時の不順で氣の毒だ、早く風が

風がば能いと云ふ事になる、道歌の所謂、

身をつめば入るも措まじ秋の月

山のあなたの人や眺めん。

で東航者が身をつめば、西航者の喜樂を願ひ、己れの方は向ひ風で、骨が折れるが、あなたの方が、樂が出来れば、夫れが何よりだと云ふ事になり、西航者が身をつめば、東航者の氣樂を願ひ、己れの方は孕み風で、樂が出来るが、あなたの方は、骨が折れよう、一時も早く風が止んで、樂が出来れば能いと云ふ事になり、光風霽月、和氣霽々人の正位を害するなどは、思もよらぬ境となるので、誠に以て思無邪のパラダイスが出来るのである。

尙又平家が、源氏の位置に立ち、源氏が、平家の位置に立ち、各々其境遇を思ひ遣たならば、格闘殺戮修羅の騒ぎは、初めより起らぬ筈である。維新の際敵と味方でありながら、談笑聲裡に、江戸城を受渡したのは、勝安房と云ひ、西郷隆盛と云ひ、實に明眼達識、兼備つた兩雄の働らきである。之が爲め、都下百萬の生靈も、塗炭の苦を逃れて、其業に安じ、双方忠義の人士も、殺傷の慘を免れて、其の道に盡すを得たのは、皆

之れ兩雄肝膽相照し事に當つて表裏透明、惑はず亂れず、邪正を觀別け、即ち信書の一節たる我輩も又其正不正に顧敢て漫に輕舉すべからずの通り、至誠一貫、只管國家世人の爲を計つたからの用意であると云はねばならぬ。新納忠元の歌に、

仇ぞとて何かは人の悪くからむ
同じ御國の同じ身なれば。

とある通り敵も味方も、皆此の博愛弘濟の心があつたならば、無益の干戈は跡を絶ち、吞噬爭奪地を掃ひ、人心の至幸至福は之れより以上に又あるべからざる事となる。

茲に至ると警察裁判監獄も兵器彈藥陸海軍も、有て用無き、太平融和の極樂國が出来るのである。道は脚下に在り、世人銘々果して如上の心掛けが有つたならば、世界を打つての、一大家庭を現出するも、眼前容易の事である。依つて此の邪正一如の表裏を辨じて、普ねく一切の世人に得道せしめ、互に相害する事無く、以て各々其の正道を履み、其の正業を樂しまん事を希望して休まざるなり。(素心居士)

五九、法界是觀世音菩薩

或時僧趙州に對つて、狗子佛性有りやと一問を試みたり趙州曰く、無と
或時僧趙州に對つて、狗子佛性有りやと一問を試みたり趙州曰く、有と
這の無有の返答は等しく同音同聲なり、或時子狗子に向つて、這漢佛性有りやと、
一棒を喰はしたり、狗子曰く、ワンと。

或時子狗子に向つて、這漢佛性無きやと、一棒を喰はしたり、狗子曰く、キャンと。
這のワン、キャンの挨拶は、等しく同音同聲なり。
趙州の返答、狗子の挨拶、詮じ來れば皆是れ父母未生以前本來の眞面目なり、宇宙の眞理の響きなり。

尙ほ此無此の有、此のワン此のキャン、世上に響く音聲を、同一眞如と觀る、的が迷悟以外の觀世音で、茲から宇宙を觀渡せば、光明遍照十方世界、在らゆる有象無象とも皆是自己本尊の隻手の聲と識る可きなり。

註に曰く、聲は眞理の發したるもの、手は眞理を包むと同時に、又眞理の現はれた

るもの等しく共に佛性の眞髓なれば、自己本尊を宇宙の外にし、迷悟以外の地に立て、世の音聲を觀る日には、無有、ソ、ン、キヤンの響き位は、隻手の中の微韻なり。

白隠が片手の聲に夢覺めて

見れば宇宙は己が手のひら。

音も無き片手の奥をたづぬれば

もみぢに満る錦なりけり。素心居士

六〇、凡情を盡して正念に歸せしめよ

熟々現時の狀況を觀察するに、學術技藝は日に月に、大に進歩して、誠に驚くべきものありと雖、道德的行爲は、漸次に退歩して、世に偽善者の跋扈するは、邦家の爲め、余輩の最も慨嘆に堪へざる所なり。今や我國は征露戰役以降、一躍して一等國の地位を占むるに至れるは、誠可喜ぶべきの現象なり。然れども未だ文明を以て自稱するの眞價なきにあらざるや。位階なく、學識なき人は又怒すべし。其身顯職にありて、權勢あり、學識ある堂々たる名士にして、驕奢を極め、酒色に耽り、不倫の行爲

を敢てして、耻づるを知らず。彼の教科書事件の如き、日糖事件の如き、殆んど枚擧に遑わらず。就中世に道德の指導者として、常に四民の尊敬をうけ、名譽ある肩書を有する僧侶中、見性悟道安心立命を眞になし居るものは、恰も晨星の如くにして、口に慈悲を説くも、邪念心を離れず、日夜營利に汲々として、己れ加持祈禱を行はば、病難災禍立どころに除去すべしと、甘言以て愚夫愚婦を誘惑し、金錢物品を貪りて、足ることなく、飢渴せる犬猫の魚肉を争うて、他くことを知らざるに似たり。

陽明先生嘗て曰ふ、山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難しと、外魔追ひ易うして、内魔滅し難きもの、而かも克己の力弱き者は、遂に忠言を人に加ふ能はざるものと知るべし。世の禪者中、動もすれば則ち曰ふ、夫れ人坐禪工夫するに非ざれば、間斷なく口に念佛を唱ふるも、因地一聲の歡喜地に入りて、自性天真の活佛に撞着せんこそ容易の業にあらずと、只管坐禪修行のみを重視して、念佛の正行を輕視す、何ぞ偏見の甚だしきや。

余は詠じて曰く、
念佛も坐禪もおなし法の道

迷はですゝめ無爲の都へ。

口説慈悲談忍辱。

心懷邪念利名爭

身居重職不知耻。

何事平然誇顯榮

譯して曰く、口に慈悲を説き忍辱を談じ、心に邪念を懷きて利名を争ふ、身は重職にありて耻を知らず、何事か平然顯榮を誇る。

鳥窠和尚曰く三歳の童子も言ふ事は易けれども、八十の老翁も行ふことは難し。と。宜なる哉、澆季の人情は浮薄に流れ利己的の觀念に富み争利の風益々甚だしく廉清なる者を見ては、之を嗤笑して偏固となし、競名の俗、月に熾にして、謙退なる者を目しては、之を嘲罵して頑陋となす。故を以て、平素不屈不撓の志操を持つるものなく、道徳日に墮落して、好道の美風漸くまさに地に掃はんとす、豈に慨然たらざるを得んや。

文學博士井上圓了氏は、徳教振興の目的を以て、修身協會なる會を設立せられ、眞言宗の碩徳釋雲照律師は、正法を興隆し、個人と國家との道徳を挽回せんとして、徳教學校を興さんと志願を懷かれしが、悲哉突然病魔の冒す所となり、溘焉遷化せ

らる。大阪朝日新聞は報じて曰く、

師は入寂前三日、眞戒良海師等數名枕頭に侍せし際、慨然として曰く、吾が今度不意の病氣に冒されたは、肉體上の病氣ではない、精神上に大きな煩悶があるからぢや。人間の道徳日に墮落し、道に盡すべき筈の一般僧侶の品性も墮落して眞の傳道者が無いのは、慨はしいことぢや。吾は正法を興隆し、個人と國家の道徳を挽回せねば、此の煩悶から解脱することは出来ぬ、徳教學校を興して、中學程度學校の模範を示したい。之を實行するのが、吾れの差迫つて居る一仕事ぢや。

今度は食事の加減で斯うなつたが、精神は確なものぢやと之を聴いたる徒弟の内には、感極まつて落涙したる人ありと。

語を寄す四海の禪流、急に生死を解脱して自己の心佛に見えんと欲せば、二六時中一意専心ならざるべからず。教義の優劣を談ずるが如きは、五里霧中の迷者に、して、其愚や憐むに堪へたり。縦令萬卷の書を縦に讀み、横に讀んずるも、文字に拘泥し、魚目を認めて眞珠となさんには、徒らに勞して益なきなり。要は只凡情を盡して、正念に歸するにあるのみ。(佛性居士)

◎師友の賛辭

別れに臨みて

美濃 岩仙寺壽山和尚

みちのりは千里へだてと秋の夜の、月は隈なく照らしけるかな。

題 松

三陽櫻井之郷 去水小弟

獨立綠芊々、自由任月懸、是非蹤跡絶、萬古嘯蒼天。

題 貴著

武藏 祥雲寺主

津々妙味咬何窮、肝膽傾來啓衆蒙、莫道沈淪葛藤窟、誰知紙背有清風。

祝 高齡

正覺寺經谷

謹祝師翁一味禪、人言娑界佛門賢、巍々常福尊僧迹、徳合蓬萊五色煙。
錦上鋪花高講座、九龍擎玉照新筵、道光從是無量壽、長振宗風幾萬年。

禪學活談終

禪學活談奥附

定價金六拾錢

明治四十五年五月九日印刷
明治四十五年五月十三日發行



著作所有

著者 原 僧 運

發行者 江 藤 邦 松
東京市日本橋區橋物町廿六番地

印刷者 金子久太郎
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町二十四番地

發行所

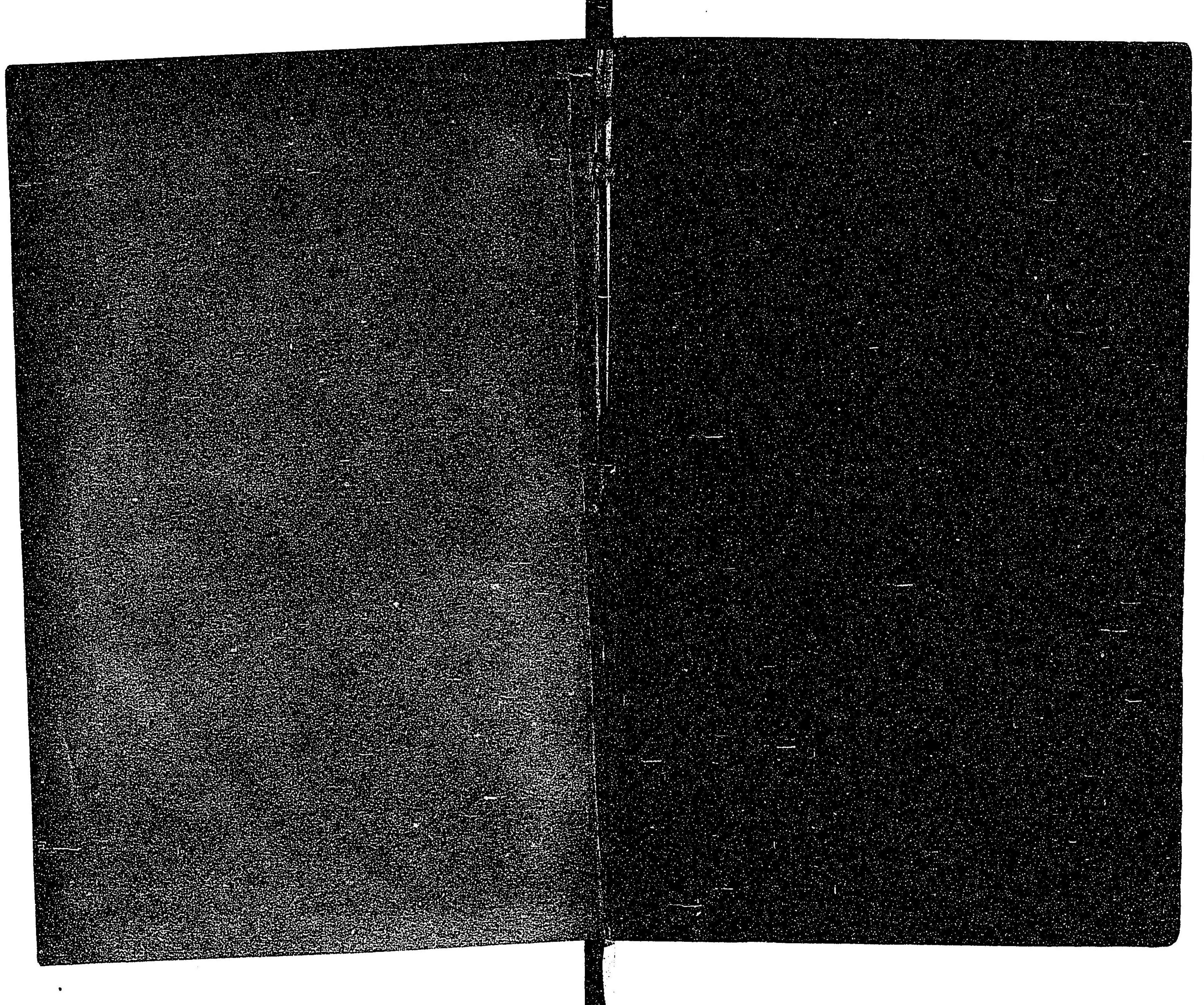
關西發賣所

東京市日本橋區橋物町廿六番地
堀越口座東京二三〇番

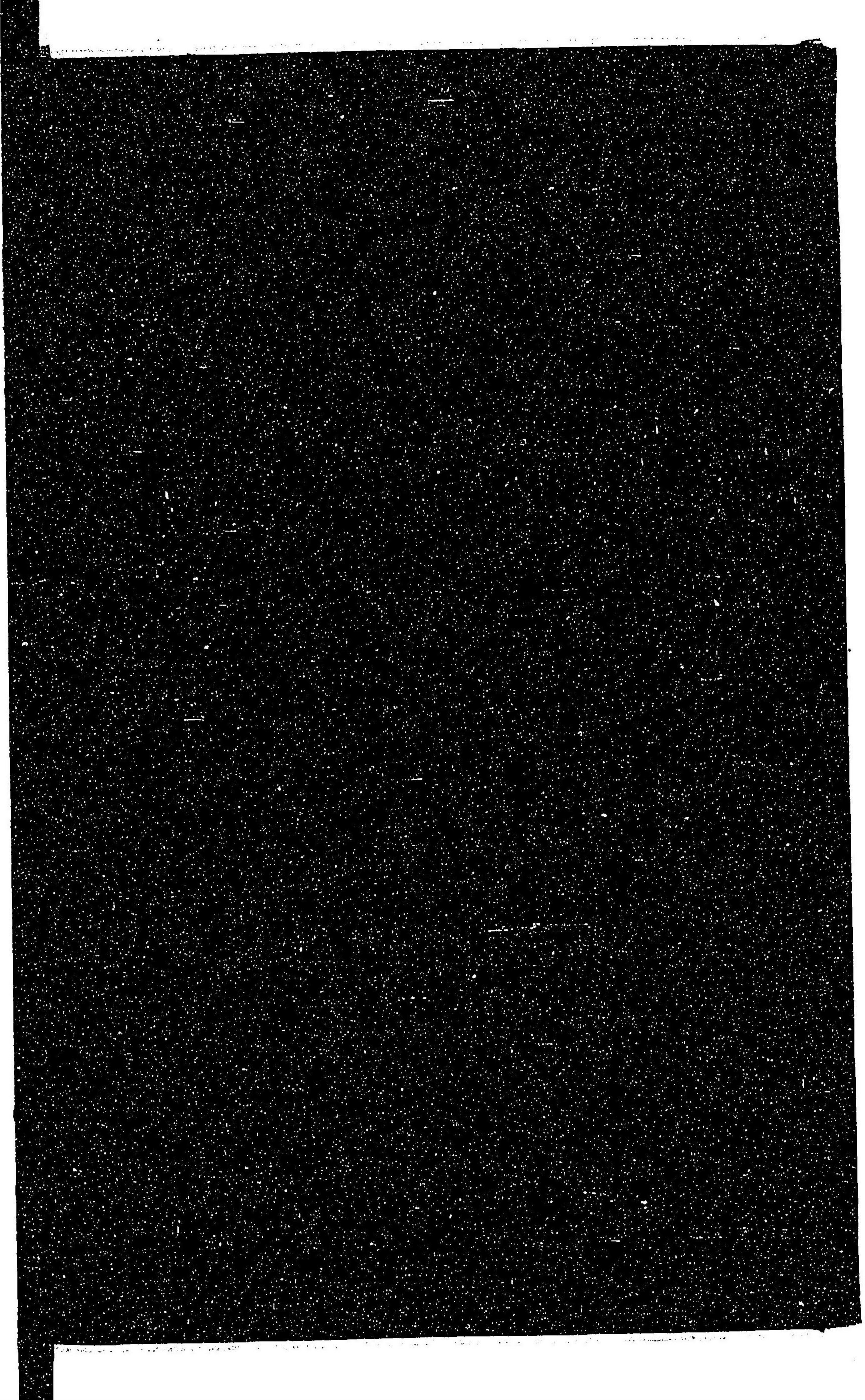
大阪市東區備後町四丁目
坂替口座大阪九九〇八番

弘學館書店
金正堂書店

324
294



1624
294





019589-000-9

324-294

禅学活谈

原僧运/著

M45.5

ABG-0363



J 24
294